

「さて、行くとしますか」

僕はいつものように、カブに火を入れてゆつくりと走りだす。いつもと違うのはただ一つ、目的地が最初から決まっている事。珍しく姉貴に今日来てと連絡が来たから向かつてる。向かう先は、姉貴が社長している会社。

「今回の出社は何日ぶりだろ……？」

前回行ったのが、今年の入社式だっけ？もう、ゴールデンウィークも終わったから、一ヶ月以上行っていないのか……？そんなことを考えながら少し走ると見えてきた。

「相変わらず大きいビルだなあ……」

ビルの横にある地下へのスロープを下って行き、駐車場に併設されている実質僕専用のバイク駐輪場へカブを停め、ヘルメットを片手にエレベータ前へ

「どこ行けばいいんだっけ、受付に顔出せば良いのか……？」

ぼーっと、エレベーターを待っていたら後ろから話しかけられた。

「セナ姉、待っていたよ」

「おや？　咲夢か。久しぶりじゃないか……何用得僕は呼ばれたんだい？」

「ああ、そのことなら上で戀姉が待つてゐるからそっちで話そう」

「了解した。じゃあ上に向かうか、エレベーターも来たことだし」

エレベーターに咲夢も乗ったのを確認しつつ階層のボタンを押す。

「咲夢、いつも通り社長室で良いのかい？」

「いや、役員会議室に居てっさ」

「ふむ……クビでも宣告されるのかな？」

「いや、違うと思うよ。まあ、何で呼んだのか詳しいことは、戀姉に聞かなきゃ分からないけど」

咲夢と一緒に役員会議室の中で待つてると姉貴が入ってきた。いつも通りダルそうな顔してるなあ……

「やつほーセナ、久しぶり」

「姉貴、久しぶり、僕は何故呼ばれたのかな？」

「んー、部下を持ってみる気あるー？」

姉貴が僕に決定事項を伝えることはあるけど、頼みごとをしてくることは滅多に無い。何か裏がありそうだな……。

「……部下？ 本当にどうしたんだ姉貴」

「いやさー、人事があちこちに突っ込んでみては色々と問題起こす子が二人もいてねー、扱いに困っちゃってさー」

「冷たい話だけどクビにすればいいんじゃない？……？」

「クビにできたら苦労しないんだよねー。セナ、滅多にテレビ見ないでしょ……？」

「基本的にキャンプ場で寝起きしてるから。見ても燃料代わりに買った新聞とかかな」

確かに情報の入手手段は新聞か、咲夢からの定期的な生存確認含めた連絡だけ。

「新聞見てたりするならわかるでしょ？　うちが現役アイドル預かってるの」

「あー、なんか見た気がする。まだ預かってたの？」

「セナ姉、流石に世間に疎すぎでしょ……」

「今年の入社式でうちに就職したんだー」

「はっ！？　入社式行っただけ居なかったじゃん」

入社式、役員席から新入社員みてたけど、居なかったよね

「演目でアイドルユニット踊ってたでしょ、あの二人セナ姉の部下になるから」

「咲夢、マジで言ってる？　……何を教えられるの？」

現役のトップアイドルの二人を預かる。

僕の生活がキャンプ場からキャンプ場っていう形で生活が完結してるの知ってるのに、僕に預けるのか？

「何でも良いよー。キャンプとかでもいいし」

「キャンプでもいいんだ……移動手段は？」

「一応、二人共普通二輪もってるみたいだからバイクかなー？」

問題を起こす子二人を抱えてキャンプ、そして、バイクが移動手段か……。

系列のケーブルテレビ使えば安全性上がるし、話題にもなる。

社会人教育としてじゃなくて現役アイドルのキャンプ生活とすればスポンサーとかも取れそうだし。

「咲夢、うちの系列放送局の番組枠どっか空いてないか確認しておいて」

「配信することによってクルーによるアイドルの安全性を確保する気……？」

「ついでの話題確保かな。後ろからテレビクルーが追いかけてインカムの内容とか、キャンペの内容放送するってどうよ」

「いいと思う、デメリットとしてはケーブルとはいえ、一般人であるセナ姉が常時映ることかな……？」

「その点も大丈夫じゃない？ 昔みたいにうちの芸能事務所に登録して活動すれば」

「姉貴、今の僕は単なる一般人だよ。あの時で活動は辞めたんだから」

「えっ？ セナ姉って芸能人だったの……？」

「咲夢には言ってなかったっけ、僕は中学の時は芸能人だったんだよ。今はもう辞めたけどね」

活動再始動って名目でも、厳しいでしょ、相変わらず姉貴がアホだ。

「戀姉……流石に雑過ぎ、まあそろそろ二人共来るよ」

「えっ、今日から……？」

部下持つ話する前から呼んでるってことは……  
これやっぱり決定事項だったのか……。

ノックの音が4回会議室に響いた。

「入って」

咲夢が入室許可をだした。さて、どんな子だろうか……。

「しっつれーしまーす」

「失礼します」

リクルートスーツに身を包んだ二人が入ってきた。

「こちら依藤戀（えとうれん）社長とセナ専務。二人共、挨拶して」

咲夢が僕達の紹介してくれた。僕達を見て二人は驚いてるみたい。

誰もが知ってる企業の社長と専務にしては僕らは想像より若すぎるだろうね。

「始めまして Leaf Cherry Blossoms の葉月莉桜（はづきりお）と」  
「同じく LCB の桜井紅葉（やぐらいくれは）です」

葉月さんと桜井さん。お互いの苗字にお互いの名前が入ってる。珍しいユニットだ。

「やーやー、依藤戀だよー！ 気軽に戀ちゃんとも呼んでくれたまえ」

「姉貴……。まあ良いか、後々後悔するのは姉貴だし。僕は依藤セナ、このダルそうな顔してる奴の妹だよ。一応、今日から君たちの上司になるらしい、気軽にセナとも呼んでくれ、よろしく」

僕の部下になるっていう話、聞いてなかったのかポカーンとしてる。姉貴、突発的に決めたな……？



「姉貴、この話二人に周知事項として知らせてあるんだよね？」

部下になる話が二人に伝わってないっていう可能性が出てきたから、念の為、姉貴に確認を取る。

「咲夢ー、どうだっけ？」

「それ、私に聞きます？ 戀姉が上司にだけ伝えといて、当日驚かせようって言うってたじゃないか」

「あ、ごめんね。二人共座っていいよ。咲夢、お茶でも淹れてあげて。んでさ、姉貴よ何故、伝えなかつた」

「えへっ……二人共ごめんね」

社長がそんな謝り方して良いのかよ……っと確認しておきたい事聞いておかないと、後が大変だ。

「姉貴、いつから始めるの？」

「その点は私から、うちの系列で全面バックアップで動けば夕方までに準備出来るけど、番組側の準備するから来週くらいでいいよね」

来週からか、そういえばRSSそろそろ整備したいんだよね。

「そういえば、使うバイクどうするの？　僕は自分の使うけど、RSSは整備するから、カブしかないよ？」

「マジかー、ならこっちでもカブを用意しようか？　現役アイドルと新人アイドルが三人でツーリングする絵って面白いと思うんだよね」

「あの、番組にするんですよね……？　それならルール決めてやりませんか？　SNSとかでいいね獲得数×十円とかでその日の行動費がもらえる……みたいな？」

葉月さんが面白そうなことを提案してくれた。

僕は至って平気だけど、若い子たちには難しいんじゃないかな？

「葉月さん、それって食費とか移動費はどうするのか？」

「それは番組予算でいいんじゃないでしょうか？　あくまでも決めるのは道の駅とかでソフトクリーム食べたりする観光費なので」

「サイコロキヤラメルの箱投げて行き先を決める、サイコロの旅でもいいんじゃないか？」

「僕的には、サイコロの旅は過酷だし、目的地を決めて、期限を決めて走ったりする方が楽じゃない？」

「セナ姉と○○の二人、片方ずつで何処から何処まで七十二時間でたどり着けるかとかの方がいいんじゃないかな？」

「大前提として過酷だねえ」

一番まともののが葉月さんの案かなあ……さて、そうすると何処で情報発信するのがいいかな。

「そういえばさ、桜井さんはどうしたらいいと思う？」

「わ、私は咲夢先輩の案がいいと思います」

——七十二時間で何処から何処まで辿り着けるか——

咲夢の案の元ネタは銀座から札幌だっけ？

葉月さんの元ネタも公共交通機関を駆使して現在地から行ける場所が一々六に振ってあつて、一度サイコロを振ったら目的地に着かないと次に進めないんだっけ。過酷だねえ……

「姉貴、最初キャンプでいいって言つてたのに、ツーリングになっちゃうよ？」

「あー、まあなんでもいいからねー！」

「一応咲夢の案と葉月さんの案、どっちで企画通るか会議通してみて。会議通す時誰発案かは秘密にしたいね。トップアイドルの顔色伺おうとしてくる奴は要らないから。で、葉月さん達のこれからの仕事は？」

「いやー、今日からセナの部下だから何してもいいよー。咲夢、セナと同様に処理していい」

「戀姉……了解。給料はちゃんと払うからね、安心してね二人共」

「ありがとうございます。紅葉、良かったね」

さて、これからどうしようか、そして、何故、こんな礼儀正しい二人が問題児扱いなのか、確認しないと。

「葉月さん、桜井さん。これから何か予定あるかな？　なければちよつと僕とご飯でもどうかな？」

「私は大丈夫ですー」

「わ、私も、大丈夫ですっ」

良かった。さて、リクルートスーツとはいえ、まともにスーツ姿の二人はいいとして僕の格好は、革ジャンにジーパンだからなあ。二人に任せるか。

「二人共、何処に行きたいところある？」

「私はスイーツバイキングがいいです！」

「わ、私も」

「りよーかい、じゃあ、あそこのホテルバイキングでいいかな。スイーツ系も揃ってるはずだし……姉貴、頼んだ」

「はいよ咲夢、何時ものところで3枚」

「了解しましたセナ姉はそのまま向かってください、二人は私が直接お送りします」

「んじゃ、後はよろしく。二人共後でね。じゃーね、姉貴、咲夢」

そんなこんなで部下を持ち、更に芸能活動復帰する事になってしまったわけだが、僕を知ってる人間は居るのだろうか……？

いざ復活しました。だけど、大ブーイングの嵐だったら嫌だねえ……今を生きる人気アイドルユニットJCBに指図する変な新人アイドルになるな……

あの後、何時も姉妹で行くホテルバイキングで二人をおもてなしして、それから数日たったある日、そろそろ企画も始動するよーって知らせを受けて、何時ものように朝の珈琲淹れるための燃料にする前の新聞広げたら、目を疑った。

『何があつた？セナ現役復帰！』なんて見出しがある。記事の内容に目を通すと姉貴が記者会見開いてるっぽい。何してくれてるんですかね。姉貴は……、今度会ったらめるか。

今日は撮影クルーと一緒にHCBの二人がココに来る予定になつてる。いつ来るのかは知らないけど。

目的地はとりあえず二人がカブに馴れるのを目標にしたいから、咲夢の案なら近場を、葉月の案なら予算をSSSで募集しようかな。

一時間ぐらいココで時間つぶしながら募集したら数票位集まるでしょ。そんなことを考えてたらカブの独特な音が聞こえてきた。乗って来たんだあの二人。これならもう少し遠くてもいいかな？

「おはよう二人共、カブには慣れたかい？」

「めちやくちや楽ですね、カブって」

「単純におじいちゃんに乗るバイクだと思つてました。郵便で使われたりするビジネスバイクの異名を持つだけありますね。どんな条件下でも乗れそうです」

「そっか、良かった。ちなみにカブって初期型以外は出前用のバイクとして開発されてたんだよ」

「ほえー」

「そうなんですか」

さて、今日の予定聞いて、今後の行動考えなきゃね

「紅葉、ちょっと予定確認したいんだけど、番組プロデューサー来てるかな？」

「プロデューサーですか？ あそこでうちのマネージャーと話してるのがらしいですよ」

莉桜達のマネージャーの目の前にはなんか見たことある顔が居る……。とそんな事を考えながらマネージャーの方に歩いて行くと、向こうが僕に気付いたみたい。

「お久しぶりですセナさん。復活したと聞いてどうしても関わりたくなって気がついたら無理やり自身を番組にねじ込んでました。スイマセン」



「僕さあ、前に貴方に言わなかったっけ？そういうことすると周りに嫌われるからやめなさいって」

「あはは、まだ中学生のセナさんに言われましたね。そういえば、またどうして突然復活したんですか？」

「あー、姉貴のせいだよ。部下持たない？って言われてそれが決定事項で、あの二人が僕の部下になったんだよ」

「なるほど。戀さんのせいでしたか」

「で、今日の予定は？」

「一応このキャンプ地で一泊して頂いて、『O田の二人にもまずキャンプがどういう流れなのかを掴んでいただきたいですね」

まあ確かに、キャンプなんてしたこと無いであろう二人だからね。  
カブで少しこの辺り観光して買い物してここに戻ってきて、キャンプかな。

「じゃあまずインカムつけて、観光かな」

「了解です。その方向で手筈整えますね。セナさんは「CB」の二人に説明をお願いします」

僕は踵を返して、莉桜たちの方を向いた。二人共カブを触って笑顔で話をする。

「さて一息ついてるとこ悪いけど、今後の予定を話すよ」

「はい。どっか行くんですかー？」

「マネージャーはここでキャンプするって言ってましたけど……？」

「両方正解だよ。カブで観光して回って夕方ぐらいにここに戻ってくるんだけど、それまでにご飯の材料調達します。いいね？」

「わーい！ 何処行くんですかー？」

「まだ分からないよ。クルー達が決めて、許可取りしてるから。本来は僕らが取らなきゃいけないんだけどね。さて、二人共、ヘルメット貸して、インカムつけるから」

「スイマセン、自分たちでやりたいです。やり方教えてもらっていいですか？」

「いいよ」

自ら動いてる二人、 本当になんか問題児なのか……？

それから少しして観光に出た僕ら三人はインカムで放送出来る範疇でくだらない話をしたり、COOLの二人に歌ってもらったり、お返しに、みんなが知ってる歌ったり楽しみながらあちこちを巡った。

「二人共ーそろそろ買い物してキャンプ場戻ろつかー」

『『はい』』

「買い物中は撮影許可降りなかったみたいで、カメラ止めるらしいよー！」

まあ実際はクルーが休憩してて僕が撮ってただけだね。スタッフ側は二人のオフショットが狙えるって思ってるみたい。

「莉桜、紅葉、晩ごはん何食べたい？」

「キャンプって何作れるんですか……？」

「あー、キャンプしたこと無いんだっけ？一応、カレーとかは定番として、パスタとかも作れるよ？」

「本当ですか！　じゃあパスタ食べたいです！」

「りょーかい、じゃあ今日は僕が作るね。そのうち二人にも作ってもらうから」

「わーい！」

「わかりました」

「あれ、二人つてどちか料理できるの？」

「私できますよ。家庭料理でしたら、莉桜はできませんけど」

さて、パスタか、何がいいかな。キャンプで作れなさそうなのがインパクトありそうだけだなあ……

僕らはワイワイと買い物を終え、カブの待つ駐輪場へ。

途中目印を持った人とすれ違う時にカメラを渡し、素知らぬ顔で莉桜達と移動する。

「莉桜、キャンプ場戻るよ。忘れ物はないね？」

「な、何で私だけなんですか！」

「だって、ねえ……？」

「もー！ 紅葉まで！」

「あはは、大丈夫なら出発するよー」

「はい！」

「いきましょー」

のんびりとまたワイワイ話しながら僕らはキャンプ場へ戻ってきた。朝来た場所だから二人も安心してゐたい。

「二人はその辺りに自分たちのテント設置しな、僕は休憩出来る様に、珈琲でも淹れとくよ。ほら、がんばれ」

「セナさんすっごい雑だよ！ 助けてよ！」

「莉桜、これも今後私達が設置して、料理してつてやらなきゃいけなくなるかも知れないんだから、今のうち練習しとこ？セナさんがいるから間違つてたら助けてくれるだろうし」

「むー、わかつたやるー」

紅葉は率先、莉桜はしぶしぶ、だけでも二人共納得して作業を始めてくれた。

テントを張つてる作業を見ながらのんびりしてる。  
なんか悪い気もするけど、これも練習だから

二人共テント設営が終わつてこつちに戻つてきた。

「ぎこちない感じだけど、一度も間違えず、設営が終わつたみたいだね。」

「おつかれ、どうだった？」

「テントつて結構簡単に組み立てれるんですね」

「簡単でしたー！」

「おー良かった。後は休憩してて。僕も設置してくるから」

二人を置いて二人のテントから適当な距離を取って、テント同士の間  
にテーブルとか置くからこれくらいでいいかなーとか考えながら、テキ  
パキと設置していく。

夕日が湖に映り綺麗な世界ができてる。キャンプチェアに座ってる二  
人に後光が差してるように見えてつい、一枚撮った。  
後でスタツフに渡して番組ページにでも載せてもらうか。

「二人共、休憩は取れたかな？取れたなら料理始めようか」

「やったー！結局何作るんですかー？」

「んー、パスタとここに取り出したるは肉塊」

「大きい！そしてセナさん雑ですって！」

「いいじゃん困ることじゃないし、とりあえず肉塊は火にかけて焼こう  
ね。でもってその隣で割ったパスタを茹でまーす。あ、悪いけど、飲ま  
せてもらうね」

「セナさんいいんですか？、一応撮影中ですよ」

「莉桜、スタツフに確認取ってみ？」

「……いいみたいー。スタッフが向こうで手で〇作ってる」

「ふふっ、そりやそうだよ。上と交渉したもの」

「曲がりなりにもアイドルのセナさんがお酒を飲みながら料理をする番組。ニツチですなえ」

「ニツチだけど、新しいでしょ？」

「確かに、じゃあ料理見てるだけなのもアレなので番組的に今日飲む物の紹介ですかね」

莉桜がカブにつけてる荷物箱から取り出したのはワインボトル、このラベルって姉貴と僕がワイン飲んでる時に限って咲夢が混ざりたそうにコツチに来る時に持つてるやつだっけ？ 実際に二人はワインなんて飲めないしね。

「私達はーこれ！ 赤ぶどうジュース！」

「あー今日のワイン工房で僕の隣で買ったやつか、美味しいよそれ」  
「セナさんは今日何飲むんですかー？」



「んー、最初はビールかなー。キッチンドランカーならぬ、キャンプドランカーってね。その後は君たちと同じ工房で何気に初めて買ったワイン飲むよー」

「おー、あれ？どうして初めて買うのに赤ぶどうジュース美味しいって何で知ってるんですか？」

「妹と二人、同級生でしょ？」

「あー、なるほど、だから赤ぶどうジュースですか」

「紅葉ーどういうことー？」

「莉桜はちゃんと話聞いてた？」

「もう！ちゃんと聞いてたよ！聞きながらお肉美味しそうって思っ

てただけ」

「莉桜ちゃんはお腹ペコペコなんでしゅねー？」

「紅葉やめてよく！セナさんどういふことか詳しく！」

「お酒飲んでる僕と姉貴、そこにお酒飲めないけど混ざりたい妹、それ持ってきて横で飲んでたよ」

「わー！あの子可愛いー」

「わかる。可愛い」

「仕事中キリッとしてるのオフになると小動物感あふれるよねー」

あちこち脱線しながら話をしつつ料理を続けていく。

「完成だよ。ほら二人共ゆっくり食べなさいね」

「わーい、ありがとうございます」

「それじゃあ、いただきます」

「「いたーだきまーす」」

普段キャンプで人に作ることがないから新鮮。そうやって話しながら  
ご飯食べて食器はササツと洗ってしまう。

この後どうするかね。打ち合わせ上だところから自由時間。

「二人は何するの？」

「うーん。あ、セナさんは何するんですか？」

「僕？ アコギ持ってきてるから弾くよー」

「私達聴いていいですか？」

「もちろん、じゃあ星空でも眺めながら聴いててね」

簡単にギターを調律して弾き始める。何曲か歌いつづけてると、二人が知ってる曲みたいで、歌い始めたので僕は弾くのに専念すると、紅葉がセナさんもって顔をしてる。邪魔しないように僕もところどころ混ざりながら、三人で小さなセツションをしたり、僕が一人弾き語りました。

「セナさん、この曲って、『Journey:Road』ですか？」

「おー、よくわかったね、この曲アコギでやる人なんて居ないのに」

「紅葉はこのアルバムずっと聞いてたもんねー」

「莉桜！ もう恥ずかしいって」

「紅葉ー恥ずかしがらなくても良いじゃない」

「好きでずっと同じアルバム聞くのはよくやるよ。さて、そろそろ二人はテントに戻ったほうが良いんじゃないかな？ 一日色々あったから二人だけでしたい話とかもあるだろうし」

「そう、ですね。おやすみなさいセナさん」

「おやすみー！セナさん！」

二人が此方に手を振りながらテントに戻っていった。

さて、一応打ち合わせでランタン消すまでは二人のテントの内部音声だけ録ってる話はしてある。さあどんな話が飛び出すかな？

「ねえ、紅葉」

「んー？」

「何処でセナさんのこと知ったの？」

「あー、セナさんが元アイドルって事？」

莉桜も知ってるはずだし、莉桜が教えてくれたんだけどな、セナさんの事。

「莉桜、中学時代に読んでたファッション誌は？」

「Lanlanのこと？セナさんに関係あるの？」

「あれにさ、よくセナさん表紙飾ってたよ？」

「マジで！？ えーわかない」

「莉桜が教えてくれたんだよ？ まあ、明日セナさんにきいてみな？」

翌朝、私達がテントから出るとセナさんはキャンプチェアに座つてのんびり湖畔を眺めて珈琲を啜つてた。

「セナさんおはようございます」

「セナさんおはです」

「おはよう、なんか僕だけ珈琲啜つてて悪いね。起きたら珈琲飲まない  
と頭働かなくなつてさ」

「私達はテント内に紅茶持ち込んでるので、気にしないでください。そ  
うだ莉桜、セナさんに聞きたいことあったんじゃないの？」

「そうだった。セナさんって LanLan に載つてました？」

「直球で聞いてくるねえ。中学の時少しの間だけ読モとかしてたよ。よ  
く僕が載つてたなんて気付いたね」

「紅葉が気付いて教えてくれたんです。セナさんが LanLan に載つてた  
よって」

「気付いた時凄いい嬉しかったです。ずっと前からファンで今もセナさん  
がアイドルしてた時に出した曲聞いたりしてるんですよ」

「懐かしいね。もう僕大人だよ。時間は花火のようだね。しかし、あれだ、昨日の曲の時点で何も言わなかったから気づかれてないと思ってたよ」

「あー！『Journey:Road』か！ そうだ、これセナさんの歌だ！」  
「そういえば、この曲何故かアレンジが一個も出てないんですよね」  
「昨日の時点で大ヒントだったのか！」

小学校五年生位の時から読モとして載り始めて、中学生になったらアイドルとして売れて、私達のカリスマ的存在だった。

ある日を境に、パツと花火が散るようにテレビから姿を消したセナさん。

私達は「CB」として、セナさんと出会い、尚且つセナさんの部下になれて、一緒に仕事する事ができる。

当時の同級生からしたら羨望の目で見られるかな、それとも莉桜みたいに皆忘れちゃってて、私達に指図する変な新人アイドルっていう視点なのかな。

奥付

初版 二〇XX年〇月〇日  
発行 幽玄怪社 依藤工夢店 (<https://slcb.xyz>)  
文章 依藤(@e10uen)

印刷 RedTrain(<http://www.red-train.co.jp/>)

落丁・乱丁本は右記サイトかツイッターよりお知らせください。  
この本についての問い合わせも同様にお願います。

本書の無断転載・転写等は著作権上の例外を除き、禁止いたします。

この物語はフィクションです。

特定の名称・個人・団体・事件などとは一切関係ありません。  
いかなる思想・信仰・良心等を肯定、否定する趣旨は一切ございません。